

プロローグ

休憩室の掲示板に貼られていた、一枚の紙が春の風に吹かれてはためいた。

太陽の光を浴び、すっかり色あせてしまったその紙には、北陸新幹線を走るという新しい車両が印刷されている。そして、車両に向かって矢印が引つ張られ、その先にはお世辞にも上手とは言えない字で「はくたか」と書かれていた。

去年、新型車両が発表された際に、サンダーボードが貼ったものだった。

「これもすっかりみすぼらしくなったなあ」

「あ、しらさぎ、剥がすなよ」

掲示板の前に立ち、上司から受け取った連絡事項の紙を貼り付けながら、しらさぎがそう言うのと、即座にサンダーボードから抗議の言葉が飛んでくる。分かっているよ、と言って、軽くその紙を指で弾くと、色あせたコピー用紙が乾いた音を立てた。

「そういえば、もうじき北陸新幹線の列車名の一般公募が始まるみたいだね」

「ん？ そうなのかな？」

サンダーボードはしかめつ面をして向かい合っていた書類から顔を上げ、しらさぎの方を見た。

「この前、事務室にポスターが届いているのを見たよ。もうじき、正式に告知が出るんじゃないかな」

「そうか……いよいよだね」

「遅くても今年中には、誰が北陸新幹線の列車になるのかが決まるって事だね」

それはつまり、彼らの同僚であるはくたかの運命が決まるということだった。

彼は今日、北越とともにJR東日本・西日本が合同で企画した「はくたか・北越サミット」に参加しているため、不在となっている。帰ってくるのは夜になってからだろう。

「落ち着かないよなあ」

「君がそわそわしてどうするの。前にも言ったけど、私たちには何も出来ないんだから」

「そんなこと、しらさぎに言われるまでもねえよ」

そう口にしながらも、サンダーボードはどこか不満げだ。だが、釘を刺しておかねば、実際に投票が始まれば、自分もはくたかに投票すると言いつい出しかねない。

「言っておくけど、こういう公募って、関係者は投票出来ないんだからね」

「えっ、そうなの!？」

予想通りの反応に、しらぎは頭を抱えなくなりながら、

「それに、例え得票数が一番だったとしても、新幹線になれるわけじゃない。調べたんだけど、東北新幹線のはやぶさは、公募での得票数は第七位だったらしいよ。それでも新幹線に選ばれたことは、上位十位くらいにエントリーされた人には、等しく機会があるってことになるんじゃないかな」

公募した体面もあるから、あまり順位が低いところからは選ばないと思うけど、と付け加えると、うーんとサンダーバードが唸る。

「それなら、やつぱり得票数は多い方がいいんだよな」
「大丈夫だよ。はくたかは北陸と関東を結ぶための列車として立派にやってきたじゃないか。今、金沢以東で東京への交通手段に列車を使っている人は、東京に行く列車は『はくたか』だ、って思っているはずだよ。それともサンダーバードは、はくたかの人気がないとも思っているのかい？」

「そ、そういうつもりじゃないけど！ もちろんオレだって、はくたかがデビューしてからずっと、きっちり仕事してきた事くらい分かっている。でも、新幹線のライバルにはあの白山さんもいるって言うじゃないか。北陸新幹線のルートは、どっちかって言うと白山さんが

走ってたルートに近い。だから、沿線の人の気持ちとしても、白山さんの方が有利なんじゃないかなって、そんな気がしてさ」

「まあ、それも一理あるけど……あとは、上がどう判断するかじゃないかな。それに、今回は西日本だけじゃなくて、東日本の意見も入ってくるわけだし」

これ以上この話し合いを続けても意味がないと、しらぎは会話を打ち切った。だが、サンダーバードもしらぎも、何も出来ない自分を歯がゆく思っていた。

1.

「おつ、ここにも貼つてある」

駅を歩いてみると、北陸新幹線の列車名を募集しているというポスターが目に入り、サンダーバードはびたりと立ち止まる。

あれから数日後、正式にJR西日本からプレスリリースが発表され、いよいよ列車名の一般公募が始まった。期間は六月末までと一月ほどだ。ニュースでも大きく取り上げられ、特に地元北陸での報道は大々的なものだった。

駅構内には至る所にポスターが貼られている。車両を前面に出したデザインは人目を引くようで、駅を利用する人がポスターの前で足を止めたり、チラシ置き場に置かれたチラシを手を取ったりしている所を既に何度も目撃していた。

「この車両のイラストも、大分見慣れてきたなあ」

車両の発表からおよそ一年が経ち、新幹線関連のイベントや報道で何度も使われていた事もあって、無意識のうち目にしてきた車両イメージは、最早見慣れたものになりつつあった。

発表があつたときの事を思い返しながら再び歩き始めると、チラシ置き場に置かれているそのチラシを、まじまじと眺めている人がいることに気付いた。途端、サンダーバードはじつとその人を見つめ、はくたかに投票してくれと心の中で強く念じた。関係者である故に投票も出来ず、こんな事しか出来ない自分だが、少しでもはくたかの力になりたいのだ。

当のはくたかは、ここ最近、新幹線になる為の研修を受けるために上京し、金沢にいない事の方が多くなつてきた。ゴールデンウィーク前後の繁忙期も終わった後である六月は、それまでに比べて暇になる時期だ。はくたか以外にも各地から現役列車が来ているというから、時間を取りやすいこの時期に集中的に研修を行っているのだろう。

今でもこんな状態なのだから、もしはくたかが新幹線になることが決まれば、今以上に忙しくなり、顔を見られない日が多くなる事は明らかだ。そうなる嬉しきげどやっばりちよつと寂しいなあ等と考えながら、職員用通路から駅構内に入ったところで、向こう側からやって来た北越とばつたり顔を合わせた。

「何つまらなそうな顔をしてるんだい」

「げ、北越さん」

「何かまた悪巧みでもしてたのかい」

北越が普段から細い目をまします細めてサンダーバードを睨む。いやいや、そんなことはありませんと頭を勢いよく横に振ると、

「どうせはくたかがいなくてつまらないなどでも思ってたんだろ？」

まさに凶星を突かれて、サンダーバードは言葉に詰まった。

「はくたかの事を心配するのでもいいけど、ちゃんと自分の仕事をしてからにしないよ」

すれ違いざま、肩をぽんと叩かれた。それ以上のお咎めはなさそうだ。有り難うございます、と遠ざかっていく北越の背中に向かって頭を下げたサンダーバードは、頭を掻きながらホームへ向かう階段を上る。

「ふ、ふ、ふ。見ちゃったー」

そう言つて、階段を上つた先の壁の影から、ひよつこりと顔を覗かせたのはしらさぎだった。にやにやとした笑みを浮かべて、サンダーバードを見ている。

「ちよ、お前、何やつてるんだよ！」

「サンダーバードが北越さんに怒られている所を見ました」

涼しい顔でそう言うしらさぎに、恥ずかしさの余りカッとしたりサンダーバードは握り拳を作つて勢いよく階段を上つた。だが、握りしめた拳はあつさりしらさぎの

手にキャッチされてしまい、目的は果たせず終わる。

「まあまあ。たまたまだよ。階段を下りようとしたらその先に北越さんがいたからさ」

「助け船出してくれたつていいだろ！」

「さっきのやりとりのどこに助け船を出せる箇所が？」

「……まあそうだけど。それよりなんだ、今日は名古屋で会議じゃなかったのか」

「会議だつたけど、もう終わったから戻つてきたんだよ」

悪いかい、と言われて、首を横に振る。

「はくたか、今日も研修でいないし……お前までこつちに帰つてこなかつたらさあ、なんか寂しいじゃん？」

「サンダーバードから、私がいなくて寂しい、なんて言葉が出るとは思わなかつたよ」

心底驚いた、という表情をしたしらさぎに、悪いかよと口を尖らせる。

その時、頭上から聞こえてきたガタンガタンという音に気付いたサンダーバードは、ちらりと腕時計を見て、しまった、という表情を浮かべた。

「やべつ、時間だ！ ちよつと大阪まで行つてくる。夜には戻るから！」

「はいはい。気をつけてね」

しらさぎに見送られながら階段を駆け上がると、既に列車はホームに到着していた。慌てて最後尾の乗務員扉

新たな始まりの場所へ

に向かって走る。こんな時に限って列車は十二両編成だ。そして、乗務員扉の前には、ベテランの車掌が渋い顔をして待っていた。

「こらっ、サンダーバード！ 遅いぞ！」

「すみませんっ!!」

普通は列車が来るのをホームで待っているものだと言句を言われて、返す言葉もない。あんな所でしらさぎに会わなければ、と恨みがましく思う一方で、寂しさがちよつとだけ薄れたことに、ほんの少しだけ感謝した。

2.

七月に入ってからというものの、一気に気温が上がった。最高気温が三十度を超える日も多くなり、湿気の多い梅雨独特の気候にこの暑さとあつて、必要以上に体力を削られる。早く梅雨が明ければいいのに、と小さな声で吹きながら、はくたかは雲で覆われた空を電車の窓越しに眺めた。

エアコンの効いた車内は快適だが、車外に出た途端に汗が噴き出す。手にしたハンカチがすぐに湿っぽくなるのを不快に感じながら、それで額の汗を拭う。

駅を出て、通い慣れた研修の会場に着くと、既に大勢の参加者が来ており、室内には雑然とした雰囲気が漂っていた。

六月末に北陸新幹線の列車名の公募が終わってから、研修に参加する人数が一気に増えた。それぞれの初回参加時に簡単な紹介はあったが、一度に覚えられる人数ではなく、また研修中は会話を交わす事もないため、今では顔と名前が一致しない人の方が多くなった。だが、人数が増えたことで、以前のようなピリピリとした空気は若干薄れた気はする。

大会議室の椅子が殆ど埋まるような参加状況の中、定時に講師がやってきて、今日の研修が始まった。

後ろの方に座ったはくたかは、ぐるりと室内を見回し、白山の姿を探した。気軽に話しかけるなど言われているものの、この中では唯一の見知った人だけに、気に掛かってついその姿を探してしまう。

白山は、いつも同じ席に座っている。室内の一番右端、前から四列目が彼の定位置だった。今日も今まで同様に、ぴんと背筋を伸ばして講師の話を受けている姿を見て、はくたかは何となく安心した。仮にも新幹線の座を争う者同士なのだから、白山が研修に来ていて良かった、と思うのはおかしいのかもしれないが、研修に参加するようになってから半年以上経った今でも、白山の事をライバルという風に見る事は出来ずにいた。

その後、目的もなく辺りに視線を彷徨わせていると、ふと、ある人物に目がとまった。去年の研修では見たことがない顔だったから、おそらく一般公募が終わった後から参加するようになった人だろう。恐ろしいほどに整った顔立ちには、周りに座る人達とは一線を画していた。見た目の歳ははくたかよりも少し上くらいか、同僚のしらさぎと同じほどに見えたが、特急などの業務に当たっている人は、実年齢と見た目の年齢が比例するとは限らない。

見覚えがある人ではないのに、不思議と視線が釘付けになった。しばらくの間まじまじと見つめていた所、視線に気付かれたか、ふとその人が後ろを振り返った。しまった、とはくたか視線を逸らそうとしたが間に合わず、一瞬、ばかりと視線がぶつかった。

視線に気付いた彼は、はくたかに柔らかく微笑んだかと思えば、次の瞬間、何事もなかったかのように顔を正面に向けた。まるで、見られる事は慣れていると言わんばかりの動作だ。

ぶしつけな視線を送ってしまったことを恥ずかしく思ったはくたかは、それ以上周りを見る事はせず、テキストに視線を落とした。だが、その不思議な人の笑顔は、しばらくの間はくたかの脳裏にこびりついて消えなかった。

本日最後の研修が終わり、はくたかは凝り固まった身体をほぐすようにぐっと背筋を伸ばした。半日とはいえ、午後七時までみつちり組まれた時間割に身体も頭もへとへとだ。更にこれから東京駅へと向かい、最終のはくたかに接続するときに乗って、金沢に戻る事になった。

ている。

「ここに来るのも、あと二回か」
以前に渡された予定表を見ながら、はくたかため息を吐いた。

新しく参加した人はこの後も何度か研修があるようだが、早くから参加していたはくたかが受けるべき研修は、残すところあと一回だ。そして九月の半ばには、これまでの研修の成果を見る試験がある。試験が終われば、その結果と、一般公募の得票数などを元に、J R 東日本・西日本の上層部で誰を新幹線にするかが決められると事前に説明を受けていた。

予定表をファイルケースに仕舞い、テキストと合わせて鞆に詰めていたその時、誰かがはくたかの傍へ近づいてくる気配がして、顔を上げた。

近づいてきたのは、午後一の研修でぶしつけな視線を送ってしまった人だった。近くで見ると、その整った顔立ちが一層眩しく見えた。

「君だったね、私を見ていたのは」

その口調は決してはくたかの行為を責めるようなものではなかった。だが、失礼な事をしたのは確かだったので、はくたかは咄嗟に立ち上がると、その人に向かって勢いよく頭を下げた。

「先ほどは、すみませんでした」